

看護学生の看護婦イメージの変化

— 3年間の追跡調査の分析より —

吾郷ゆかり・高橋恵美子

A Study of the Process of Change in Image of Nurses in Nursing Students

Yukari AGO, Emiko TAKAHASHI

概 要

島根県において初めての看護短大が開学して3年たち、平成10年3月には第1期生が卒業する。看護短大生は入学してから3年間で、どのように看護婦イメージを変化させて成長してきたのか、これまでの教育の軌跡をみるためにも学生の意識の実態を把握することが必要と思われた。平成7年より島根県内の4施設の看護学生を対象に看護婦イメージの調査を3年間継続して行った。いずれも3年過程の職業教育としての看護教育であるが、学校毎に看護婦イメージの変化に特徴があった。短大生の場合、学年別に見ると「責任感の強い」「慎重な」などの看護の専門的イメージや「温かい」「親切的な」などの看護婦の性格的イメージが2年次から3年次にかけてマイナスイメージ寄りに変化する傾向にあった。さらには学生時代と卒業して看護婦になってからの看護婦イメージの変化をみるとマイナスイメージ寄りに変化する傾向が明らかになった。

キーワード：看護学生，意識調査，看護婦，イメージ，SD法

I. はじめに

教育とは単に知識や技能を教えるのではなく、学生の持つ能力を引き出し、目的に応じた行動の変容を起こさせることである。一般に人間の行動はイメージによって規定されていると言われており、看護学生の行動の変化は看護婦イメージの変化によると思われる。そこで、3年前より学生の看護に対する意識を知るために学生の看護婦イメージを検討してきた。看護学生の看護婦イメージについてはこれまでに、一般学生との比較や、性格特性や入学動機、看護婦志向性との関連で調査結果^{1),6)}を報告してきたが、今回は3年間の追跡調査の結果を分析した。

看護婦イメージの先行研究^{2)~5)}には同時期に実施した異なる対象の結果分析はあるが、同じ対象を継続して調査したものは見あたらなかった。島根県内の他の専門学校生と比較しながら看護短大生の特徴はどのような点にあるのかを考察した。また、看護専門学校を卒業し看護婦として働いている人々に追跡調査を行い、学生と看護婦のイメージを比較検討した。

II. 方 法

1. 対象と調査方法

島根県内の看護短大生83名とA, B 2校の看護専門学校生70名、またC看護専門学校卒業後の看護婦58名の計211名を対象に、看護婦イメー

ジに関する追跡調査を行った。調査期間は平成7年10月から平成9年10月まで、年に1回、同じ時期に同じ内容の調査を3年間継続して行った。また、学生には、併せて看護職志望調査を行った。学生は集合調査が基本であったが、実習等で一齐に行えない場合は留め置き調査を行い、新卒看護婦には郵送調査を行った。

なお、看護婦イメージは真鍋ら²⁾の作成した27組の形容詞対を用い、SD法(意味微分法: semantic differential method)により測定した。

2. 分析方法

看護婦イメージについては各形容詞対についてポジティブなイメージの形容詞を左側に、ネガティブなイメージを示す形容詞を右側に分け、その間を7点から1点として点数化し、実得点で因子分析を行った。

また、27対のそれぞれの形容詞のイメージ得点について平均値を算出し、統計解析ソフト: エクセル統計(マイクロソフト社)を用いて検定(母平均の差の検定: 対応のある一対の標本)を行った。また、学生に行った看護職志望調査

では学校毎にパーセンテージを算出して比較を行った。

III. 結 果

有効回答は156名より得られ、有効回答率は73.9%であった。そのうち、看護学生は3年間全て有効回答の得られた112名の3年分の標本336標本と、看護婦は学生3年次と今回の全てに有効回答の得られた44名の2年分の88標本の総数424標本について分析した。(表1)

1. 看護婦イメージ27項目に関する因子分析

因子数を3因子解から5因子解まで行った。「軽労働—重労働」の項目はいずれの場合も因子負荷量が0.3以下であり、除外して26項目で再度分析を行った。回転前の固有値が1.0以

表1 調査対象の概要

	対象者数 (人)	有効回答数 (人)	有効回答率 (%)	有効回答 標本数
看護短大生	83	49	59	147
専門学校生A	40	37	92.5	111
専門学校生B	30	26	86.7	78
看護婦	58	44	75.9	88
計	211	156	73.7	424

表2 看護婦イメージの因子分析結果

(有効サンプル=424)

項 目 内 容	抽 出 因 子				
	I	II	III	IV	
看護の魅力性	魅力的—魅力のない	0.756	0.126	0.132	0.028
	好きな—嫌いな	0.687	0.166	0.273	-0.067
	面白い—つまらない	0.650	0.018	0.228	0.076
	やりがいのある—やりがいのない	0.612	0.338	-0.044	-0.009
	価値のある—無益な	0.601	0.375	-0.109	-0.015
	豊かな—貧しい	0.564	0.011	0.148	0.197
	自由な—きゅうくつな	0.484	-0.052	0.313	0.062
	美しい—汚い	0.453	-0.009	0.332	0.174
	スマートな—やぼったい	0.413	0.171	0.099	0.372
専門的イメージ	明るい—暗い	0.406	0.144	0.385	-0.009
	安定した—不安定	0.350	0.054	-0.106	0.256
	責任感の強い—無責任な	0.193	0.598	0.151	0.100
	機敏な—鈍感な	0.158	0.588	0.183	0.096
	重要な—重要でない	0.249	0.565	0.068	-0.001
	慎重な—軽薄な	0.013	0.526	0.206	0.151
	勤勉な—怠慢な	0.182	0.505	0.183	0.141
	進歩的—保守的	0.245	0.341	0.207	0.173
	性格的イメージ	温かい—冷たい	0.280	0.191	0.586
親切な—不親切な		0.233	0.333	0.572	0.013
正直な—ずるい		0.213	0.141	0.440	0.146
清潔な—不潔な		0.036	0.134	0.389	0.112
知的イメージ	理性的—感情的	-0.105	0.102	-0.056	0.488
	科学的—非科学的	-0.035	0.140	-0.012	0.486
	知的な—知的でない	0.211	0.364	0.200	0.386
	礼儀正しい—行儀悪い	0.045	0.138	0.328	0.378
	高尚な—低俗な	0.236	0.188	0.286	0.350
	二乗和	3.929	2.429	1.985	1.265
	寄与率	0.151	0.093	0.076	0.049
	累積寄与率	0.151	0.245	0.321	0.370

上で累積寄与率が30%以上あることを選定基準にし, 4因子解が最も解釈が容易であったのでこれを採用した。バリマックス回転後の二乗和が1.265で累積寄与率は37%であった。(表2)

第1因子は「魅力的—魅力のない」「好きな—嫌いな」「面白い—つまらない」など11項目からなり, 看護に対する魅了性と考え, “看護の魅力性”とした。第2因子は「責任感の強い—無責任な」「機敏な—鈍感な」「重要な—重要でない」など5項目からなり, 看護する者の態度や姿勢など専門職としての看護婦のイメージの集まりととらえ, “専門的イメージ”

とした。第3因子は「温かい—冷たい」「親切的な—不親切的」「正直な—ずるい」など5項目からなり, 看護婦の性格的な資質のイメージの集まりと考え, “性格的イメージ”とした。第4因子は「理性的—感情的」「科学的—非科学的」「知的な—知的でない」などの5項目からなり, 看護の学問としてのイメージの集まりと考え, “知的イメージ”とした。

2. 学校別, 学年毎の看護婦イメージ変化の比較

1) 短大の場合: 全体的に1年次から2年次の看護婦イメージは好イメージ寄りに変化す

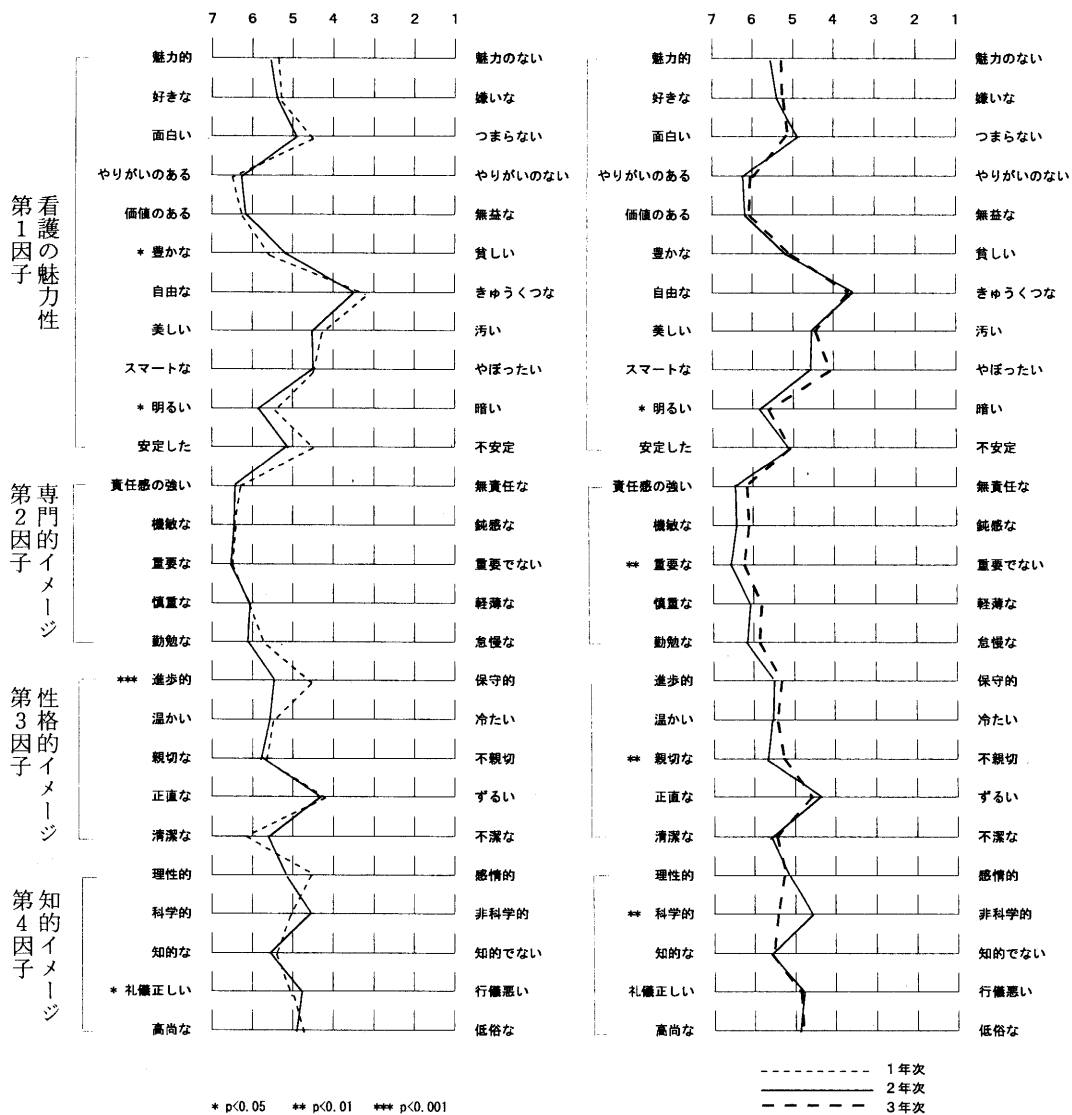


図1 短大生の看護婦イメージ変化
(1年次から2年次, 2年次から3年次の変化)

る傾向があり, 2年次から3年次の変化はマイナスイメージ寄りに変化する傾向にあった。

項目毎に見ると1年次から2年次の変化は26項目中17項目がプラス方向への変化であり, 「進歩的—保守的」などに有意差があった。

また, 9項目がマイナス方向への変化であり, 「礼儀正しい—行儀悪い」などに有意差があった。2年次から3年次の変化をみると, 8項目がプラス方向への変化であり, 「科学的—非科学的」の変化が有意であっ

た。反対に18項目がマイナス方向へのイメージ変化であり, 「明るい—暗い」「重要な—重要でない」などの3項目に有意差があった。

2) A 専門学校の場合: 全体的に1年次から2年次の変化よりも2年次から3年次にかけて看護婦イメージがプラス方向に変化する傾向があった。項目毎にみると1年次から2年次の変化では12項目に, 2年次から3年次の変化は18項目にプラス方向への変化があった。因子別に見ると第2, 第3, 第4因子にプラス方向への変化があり, 特に

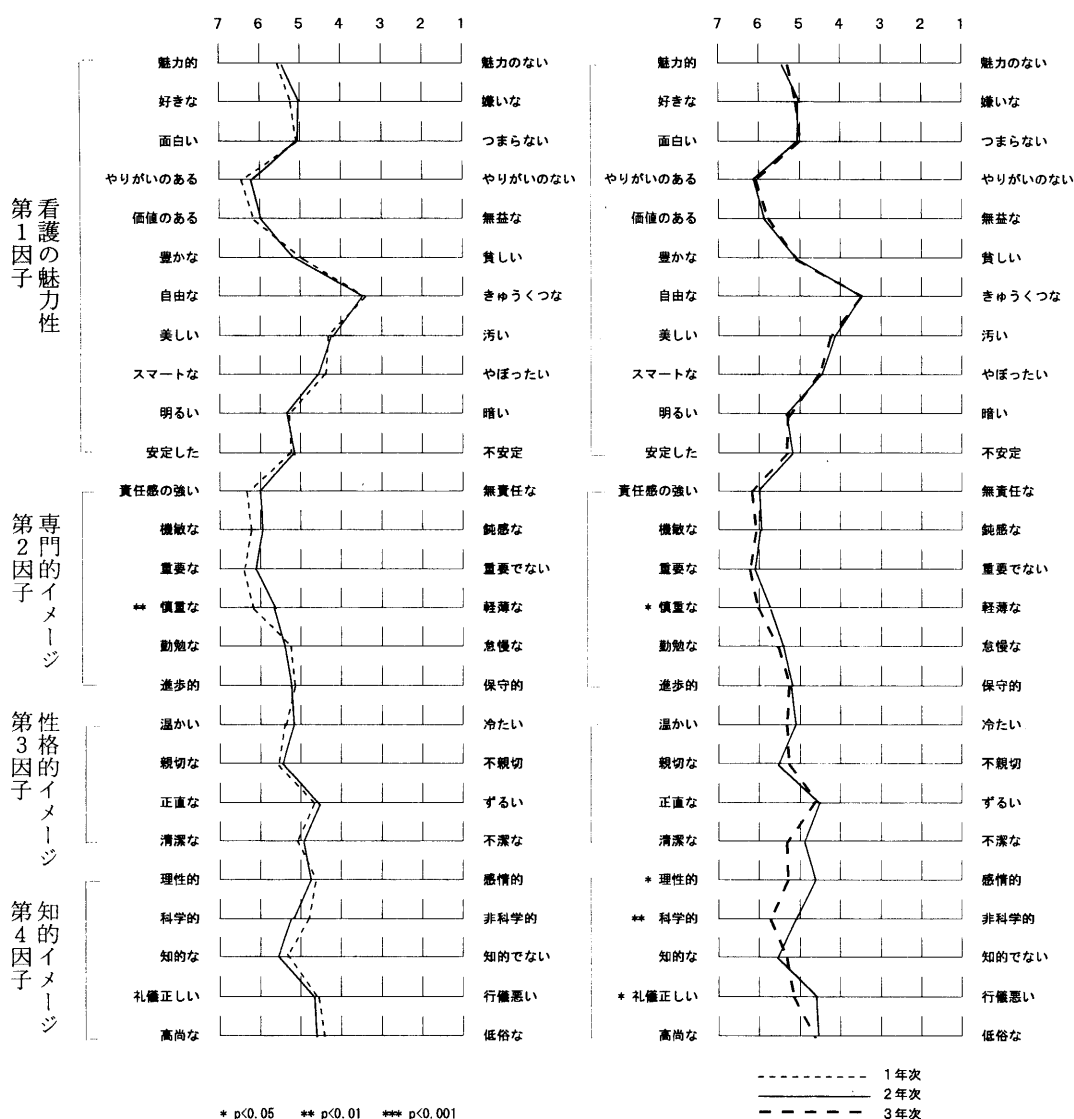


図2 A 専門学校生の看護婦イメージ変化 (1年次から2年次, 2年次から3年次の変化)

第4因子の知的イメージは1年次から2年次, 3年次にかけてプラス方向に変化し続けており, 2年次から3年次では「理性的—感情的」「科学的—非科学的」「礼儀正しい—行儀悪い」の項目が有意に変化していた。

- 3) B専門学校の場合: 全体的に見て1年次から2年次の変化より2年次から3年次にかけての看護婦イメージがプラス方向に変化する傾向があった。因子別に見ると第2因子のマイナス方向への変化が大きく, 「責任感の強い—無責任な」「勤勉な—

怠慢な」「重要な—重要でない」に有意差がみられた。また, 第3因子の性格的イメージは1年次から2年次, 3年次にかけてマイナス方向に変化し続け, 第4因子の知的イメージは1年次から2年次, さらに3年次にかけてプラス方向に変化する傾向にあった。

- 4) 看護学生から看護婦の場合: C専門学校卒業後の看護婦の看護婦イメージは全ての項目でマイナス方向に変化していた。有意差のある項目は9項目で「好きな—嫌いな」「やりがいのある—やりがいのない」「温

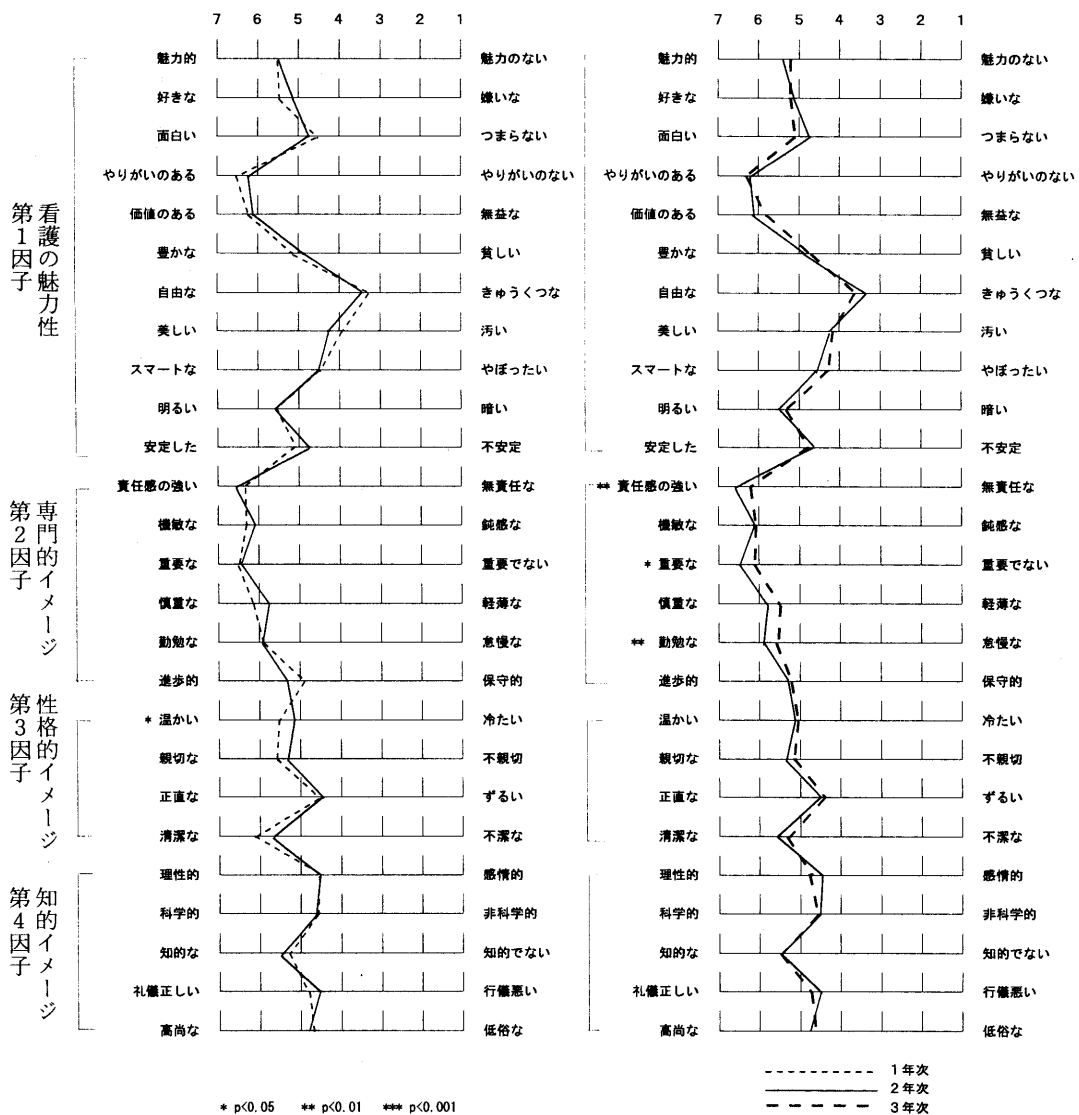


図3 B専門学校生の看護婦イメージ変化 (1年次から2年次, 2年次から3年次の変化)

かい—冷たい」のマイナス方向への変化が顕著であった。因子別に見ると第1因子の看護の魅力性と第3因子の性格的イメージの変化が大きいことがわかった。

3. 看護職志望調査結果

「看護職に就くことは第1志望か。」という問いに対し、短大生は93%, 専門学校生は98%がはいと回答していた。(図5)

「第1志望の職種は何か。」という問いに対しては、専門学校生の95%の学生が看護婦, 約5%がその他と答えたのに対し、短大生は59%

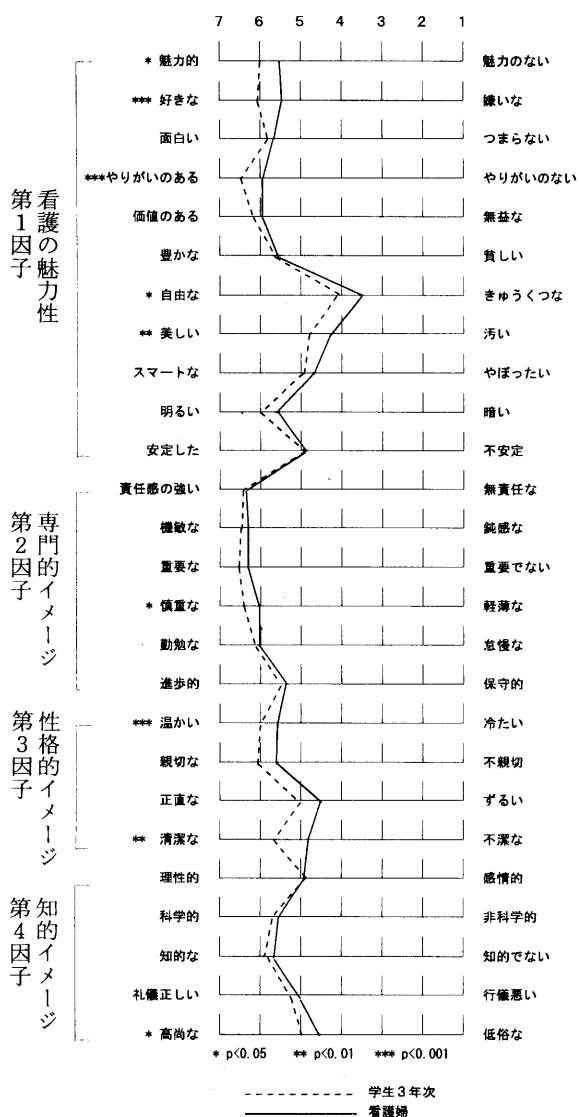


図4 C 専門学校生の看護婦イメージ変化 (学生3年次から看護婦の変化)

の学生が看護婦で, 助産婦13%, 保健婦(士)12%, 養護教諭7%であった。(図6)

看護系学校への入学の意志は「自分の意志」と答えたのは短大生では78%であり, 他の専門学校生より低いことがわかった。(図7)

IV. 考 察

短大生の看護婦イメージは, 1年次から2年次ではプラス方向へ, 2年次から3年次ではマイナス方向に変化していた。これは他の研究結果による短大生の1年生と2年生の比較では, 2年生の方がイメージが後退するという報告⁷⁾とは異なる。看護婦イメージは教育の影響を受けて, 学年が進むにつれて変化することが明らかになっているがその変化のしかたは短大と専門学校の違いと見るより, 専門学校間の比較でも違いが見られることから各々の学校の違いと

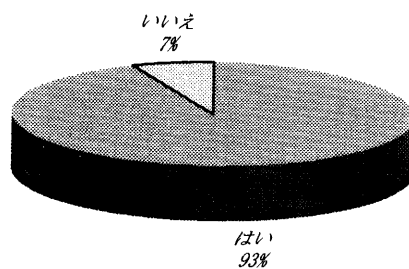


図5 短大生の看護職志望の割合

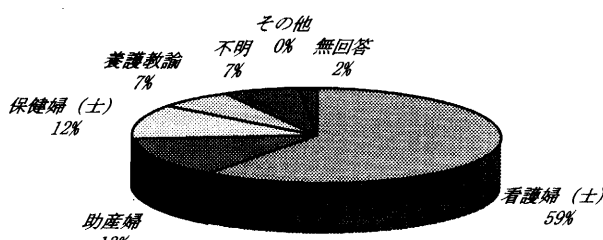


図6 短大生の第1志望職種

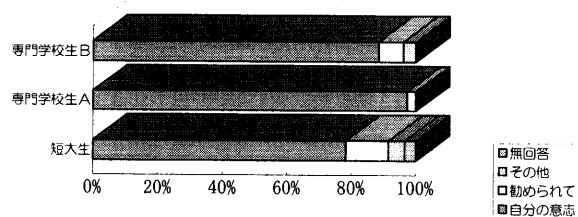


図7 看護系学校入学の意志

考える。教育施設によって教育理念やめざす将来の看護婦像などに違いがあり、それぞれの学校毎にイメージ変化に特徴として現れたと考える。短大生の1年次から2年次の変化がプラス方向に変化する傾向にあるのは、入学時や現在の看護婦志向性が関係すると思われた。看護婦を目指す学生の割合が他の専門学校生に比べると低いため、1年次の看護婦に対する好意的イメージが低く2年次にかけての理想的・幻想的イメージの修正が少ないためと思われる。

また、2年次から3年次の看護婦イメージの変化に影響するのは、実習体験が増えることが大きい要因と思われる。特に「専門的イメージ」や「性格的イメージ」が低下するのは身近に看護婦の働く姿を見たり、看護体験をすることが幻想的イメージから現実的イメージに修正される過程⁷⁾と見ることできる。実習体験は学生にとって知識を自分の技術にするための第一関門である。知識のみで看護のイメージを膨らませすぎると現実離れした幻想へと向かう恐れがあり、学生のイメージの修正は必要な過程である。病院実習は現実的な看護婦イメージに修正する体験といえる。3年次の看護婦イメージは2年次よりマイナス方向に変化しているが、看護婦イメージそのものは好イメージ寄りである。

短大生と専門学校生の看護婦イメージ変化の違いは、専門学校間の比較でも違いが見られることから、教育内容による差異というよりは教育するものの考え方や関わりの度合いによる違いと見る方が適当と思われる。しかし、2者の違いでみると短大生の場合、看護職志望の割合(中でも看護婦志望の割合)が専門学校生より低いことが影響していると考えられる。短大生は専門学校生に比べ、入学時から看護婦を目指すという目的意識が明確でないためという報告があるが今回の調査でも同様のことがいえる。

また、看護学生から看護婦への変化では学生時代の看護婦イメージから全てにおいて低下しているのは注目に値する。卒後1、2年目は仕事に慣れるのに精一杯で看護に魅力ややりがいを感じる余裕さえないことは想像できる。しか

し、看護婦になるとやりがいなどの看護の魅力や温かさなどの性格的イメージまでマイナス方向にイメージ変化する現状を見ると現実とのギャップをつくる要因を考える必要がある。

V. 結 論

1. 看護の専門教育を受ける過程で、看護婦イメージは変化する。本校短大生の場合、1年次から2年次の変化より2年次から3年次の変化が大きく、実習による現実的な影響が大きいと考えられる。
2. 看護婦イメージの差は短大生と専門学校生の差というより、各々の学校で異なっていた。
3. 卒業後間もない看護婦の看護婦イメージは学生時よりマイナス方向に変化していた。

謝 辞

この研究の意識調査をするにあたり、各学校の学生、教職員の方々に快くご協力いただきました。こころよりお礼申し上げます。

文 献

- 1) 吾郷ゆかり, 大石益男: 看護学生の看護婦イメージ—短大生と専門学校生の比較—, 山陰医学看護学教育研究会誌, 59-63, 1996.
- 2) 真鍋淳子, 野尻雅美, 中野正孝, 他: 看護学生の看護婦イメージの研究—大学生と短大生の比較—, 看護教育, 35, 427-433, 1994.
- 3) 謝花美佐子, 平良広子, 安里栄子, 他: 看護学生の看護婦イメージの学年別による検討—動機と意志との関連性—, 看護教育, 25, 89-93, 1984.
- 4) 水野智, 佐野幸子, 若林満: 看護学生の職業イメージ—幻想のイメージを乗り越えて—, EXPERT NURSE, 8, 30-33, 1992.
- 5) 石塚百合子, 白佐俊憲, 木村泰子, 他: 看護婦イメージの研究, 看護教育, 23, 446-453, 1982.

- 6) 吾郷ゆかり:看護学生の看護婦イメージ—幻想
的イメージから現実的イメージへの変化—,
山陰医学看護学教育研究発表, 1997.
- 7) 佐藤和子他:短大生の意識調査(第2報)看護
婦のイメージに関する検討, 聖マリアンナ医大
紀要, 15(2), 226—227, 1988.